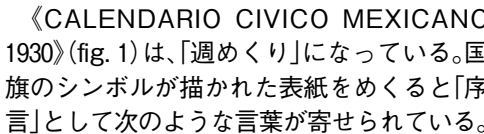


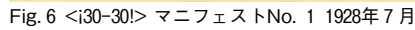
メキシコ・ルネサンス、もうひとつの美術運動

—1930年メキシコのカレンダーを巡って



今日のメキシコは、
未来につながる威厳ある大志、団結の叫び、
辛辣な思想を時には格言として、
あるいは平易な言葉で表現しうる
思想家たちのイデオロギーに基づいて
教育される必要がある。
絶え間なく過ぎ行く時間の中にあっても、
我々の日々の生活のなかには、
国民の魂や人間的な文化、
さらには芸術性の高いメッセージが
残されるべきである。

次のページではメキシコ国歌が掲載され、その後、1月1日と毎週日曜日にはメキシコの作家たちの版画が1点挿入され、一年間を53点の版画でつづる洒落た作りになっている。作品を寄せた作家は20名を数え、当館の所蔵作家としては、ディエゴ・リベラ(1886-1957)が3点、ホセ・クレメンテ・オロスコ(1883-1949)、ホセ・ガダルルーベ・ポサダ(1852-1913)の作品がそれぞれ1点掲載されている。注目すべきは、当時メキシコ・トラルバムの野外美術学校で子供たちに絵を教えていた北川民次(1894-1989)の木版画作品(fig. 2)が7点も掲載されていることである。木版としては細密に彫られた《クワウテモクの拷問》(fig. 3)、《新大陸発見》(fig. 4)は黒と白の効果によって群像を巧みに表現している。その他、フェルナンド・レアル(1896-1964、12点掲載)



美術館の場合を考えると、一番に守るべきものは作品です。館の雰囲気作りや新しい取り組み、来館者への配慮も大切なことですが、博物館施設として次世代に貴重な文化財を伝えることは何物にも代え難い責務です。それに対する理解と協力を常にお願しながら、皆さんの知的好奇心を刺激する場であり続けるための努力も怠らないようにしたいと思います。(3)



Fig. 2 北川民次《フナ・イネス・デ・ラ・クルス尼僧の像》



Fig. 3 北川民次《カウテモクの拷問》



Fig. 4 北川民次《新大陸の発見》



Fig. 5 フェルナンド・レアル《三日月の踊り》

極的に参加しながら、“芸術活動を通じて”この運動に役立とうと考えている者」と表明した。革命時に農民たちに使用されていた銃の名前に由来する絵画グループ<i30-30!>(トレインタートレンティスタ)”は、その名が示すとおり、アカデミズムを“標的”とし、そして彼らの抗議活動は正しくライフルを発砲するかのごとく、激しく、騒がしいものであった。1928年7月、<i30-30!>は初めてのマニフェスト

作ったものであった。だが、そのこと以上に注目すべきは、こうした<i30-30!>の活動が、絵画や壁画ではなく、木版画によって実践され、木版画が表現メディア、さらには批評の手段としてその地位を復活したことである。

同月、絵画グループ<i30-30!>は第一目の展覧会を開催し、その後も年内に五回のマニフェストと二冊の機関誌、八回の展覧会を開催している。五回目のマニフェストを発表した1928年

(fig. 6)を作成し、メキシコ・シティの街頭での「直接行動」に出た。彼らが配布したマニフェストとは、サンカルロス美術学校を“支配”するアカデミズムと官僚主義、さらには公務員や卑劣な知識階級を槍玉に挙げ、彼らを小動物や害虫に譬え、痛烈な批判を下すものであった。例えば、芸術家気取りの官僚は蛙に、またアカデミーに引きこもり、人体デッサン教室を仕切る教員画家は蚊に譬えられ、それらに対して彼等は、「ガソリンを撒ぎ、消毒剤を散布し、これらの“寄生虫”を駆除しなければならぬ」とまで主張した。このマニフェストは、メンバーの中心的存在であったフェルナンド・レアルの木版画によるものだが、こうした体制批判や社会風刺は、革命を“煽動”した市井の芸術家で、彼等の偉大な先駆者であるボサダの精神を引き継ぐものでもある。実際五回に亘って発行されたマニフェストのレイアウトやその配布の仕方は、ボサダのそれ(fig. 7)に

似ていたものであった。だが、そのこと以上に注目すべきは、こうした<i30-30!>の活動が、絵画や壁画ではなく、木版画によって実践され、木版画が表現メディア、さらには批評の手段としてその地位を復活したことである。

同月、絵画グループ<i30-30!>は第一目の展覧会を開催し、その後も年内に五回のマニフェストと二冊の機関誌、八回の展覧会を開催している。五回目のマニフェストを発表した1928年

に横たわる、展示方法、あるいは作品解釈に対する根本的な認識のズレかもしれません。美術館で作品を展示するということは、その作品に対する解釈を披露するというに他なりません。私はこの作品をこう解釈するから、こんな風に見てください、というのが展示をするということです。順路、すなわちどの作品の後にどの作品を並べるかという順番も、解釈を披歴する方法の一つといえるでしょう。同じ作品でも、その前後に見る作品によって印象が大きく変わるという経験をされた方も少なくないと思います。問題はその解釈をどこまで厳格に適用するかです。厳格にすることは、この作品はこう見てくださいと強いメッセージを送ることで、果たしてそのような一元的な解釈に誘導することがよいのか、という疑問が美術館側にはあります。むしろ多様な解釈に導く展示こそが、芸術の真の豊かさを伝えることにつながるのではないかと考えるわけです。なんだか展示の曖昧さの言い訳をしているように聞こえるかもしれませんが、決してそうではありません。日本の美術館の展示室では、矢印などによる順路案内がよく見られますが、海外の美術館では減多に目にしません。それは順路に限らず、作品の解釈については鑑賞者の自主性を尊重する、という思想によるものと思われます。主体的に、能動的に向き合った時、作品はより豊かな喜びを鑑賞者に与えてくれるはずだという思想です。つまり鑑賞者を大人として尊重するということですね。決して言い訳ではなく、当館でも来館者の皆さんを大人としてお迎えしたいと思います。(F)

あるなあ、といつも感じています。私などは、せいぜい旅行の折に美術館のミュージアムショップで鉛筆を買ってくるぐらいですので、とても安上がりなのですが、さて、美術品をコレクションするとなると、なかなか大変です。美術品というものの価格を考えれば、余程余裕のある方でなければ、充実したコレクションを築くことができないことは一目瞭然ですね。そして、もちろん一流の美術品を見抜く審美眼がなければならないことは、言うまでもありません。今回の展覧会は、台湾のコレクターの方のご好意により実現するもので、「ヤゲオコレ

クション」と呼ばれる世界トップクラスの現代美術コレクションを展示するものです。常玉(サンユウ)、フランシス・ベーコン、ザオ・ウーキー、アンディ・ウォーホル、杉本博司、ジェフ・クーンズ、蔡國強、ロン・ミュエク、ピーター・ドイグ、マーク・クインなど、約75点が展示されますが、どれもそれぞれの作家の代表作ともいえる名品ばかりです。展覧会のタイトルは「現代美術のハードコアはじつは世界の宝である展」。ハードコアとは中核、中心といったような意味ですが、今回の展覧会で、まさに現代美術の中核ともいえる作家の作品が見られる、という意味合

12月には、メンバーの中から逮捕者やその職場から追放される者が相次ぎ、グループは、マニフェストの発行と機関誌の発刊を自粛、その活動は退潮せざるを得ないかのように思われた。だが、年が明けた1929年1月、グループ<i30-30!>がメキシコ・シティのテント張りの「サロン」「カルパ・アマロ」(fig. 8)で開催した展覧会は、そうした危機感とある種の閉塞感を払拭させるものとなった。この展覧会には、26作家の170点余の木版画が出品されたが、それらはキャンパス地のテントにピンで留められ、会場内では即興のパフォーマンスが展開された。メンバーがギターをかき鳴らすと、迷うことなくテントの中に入ってきた数百人もの労働者は、民謡や聖歌を歌いだし、果ては踊り出す者さえ現れ、照明によって演出されたその光景は熱狂にも似た正しく“祝祭空間”を現出させた(fig. 9)。この展覧会は、結成当時に彼等が目指した「大衆に直接語りかけられるような類いの作品」が初めて達成されたことを、彼等自身が強く確認するものとなった。

多数の労働者を呼び込み、野外美術学校派の

感想ノートから

ハイレッド・センター：「直接行動」の軌跡展

2013年11月9日～12月23日
名高い謎の現代美術グループ「ハイレッド・センター」の初めての本格的な展覧会として、若い世代の関心と期待を集めて開催しました。『感想ノート』のなかから、アット・ランダムに感想や意見を以下に抜粋します。
▲芸術の本質をアツく、そして遊びながら追求した50年前のヒリヒリした空気が伝わってきました。芸術の本質はきっと「あそび」です。▲ハブニングの現場に居合わせたかったなあ～!! と思いました。実物の“拡大”千円、本当にすごい!! ▲面白かったです。日常の「スキマ」のようなところに目を向け、「常識」のウラをかいていくところが痛快でした。記録写真での周囲の人たちの不審げな面持ちが楽しかったです。▲ななめの赤い説明文が非常に読みにくかった。途中であきらめました。▲初

クシオン」と呼ばれる世界トップクラスの現代美術コレクションを展示するものです。常玉(サンユウ)、フランシス・ベーコン、ザオ・ウーキー、アンディ・ウォーホル、杉本博司、ジェフ・クーンズ、蔡國強、ロン・ミュエク、ピーター・ドイグ、マーク・クインなど、約75点が展示されますが、どれもそれぞれの作家の代表作ともいえる名品ばかりです。展覧会のタイトルは「現代美術のハードコアはじつは世界の宝である展」。ハードコアとは中核、中心といったような意味ですが、今回の展覧会で、まさに現代美術の中核ともいえる作家の作品が見られる、という意味合



Fig. 8 「carpa Amaro」の外観。1929年



Fig. 9 carpa Amaroでの「i30-30!」展示風景 1929年1月

勝利を強く印象づけた1929年1月の“テント小屋”での展覧会には、メキシコ壁画運動の“三巨匠”の一人で、当館がその作品を所蔵するダヴィド・アルファロ・シケイロス(1896—1974)も三点の版画作品を出品していた。だがリベラやオロスコよりも彼等に近い“同志”であったはずのシケイロスの作品は、このカレンダーには収録されていない。このカレンダーがメキシコ・シティの全市民に配られた1930年とは、シケイロスにとって“最悪”の年となった。政治犯として逮捕され、メキシコ・シティの連邦地域刑務所でおよそ一年に亘る獄中生活を余儀なくされていたのだ。それでもなお、シケイロスは獄中で制作活動を再開したのだが、果たして、独房の彼の許にもこのカレンダーは届けられたのだろうか？(J.T.)

*《CALENDARIO CIVICO MEXICANO 1930》の「序文」翻訳に関しましては、中村麻弥さんの協力を得ました。記して謝意を表します。

めてHRCを知ったのは中学生のときでした。その時は何だかすごく衝撃を受けたのですが、今日彼らの活動内容を詳しく知って、私もやりたくなりました。公共の場に芸術もちこむこと。▲HRC展、見に来てやはりよかった。実は今日は2回目。いろいろ考えさせられる「直接行動」という芸術。▲若者が面白がっているのか、ふざけているのか、まじめに考えているのか、よくわからない表現が芸術になっていることに驚いた。▲美術誌の写真でしか見た事の無かったのと、何となく、こういった即興的な作品はどこか雑で、一歩間違えたらガラクタ以下…という感じになってしまうのかな…と思っていました。実際見て、どの作品もとても完成度が高く、一つの作品としてクオリティが高かったのでビックリです。ハイレッド・センターの意識の高さを感じました。▲東京から観に来た。2020年のオリンピックで、直接行動がよりアクチュアルな問題となるのか、が専らの関心です。素晴らしい展示でした。巡回展も楽しみです。▲HRC初めて存在を認識しました。う～ん50年以上も前に、こんな斬新なことを…。ローブが足にからみそうな展示…も挑戦ですネ。(sy)

いが込められています。そして、じつは世界の宝である、という言葉によって、こういったコレクションが個人の宝物であるだけでなく、世界の人々にとっての大切な宝物であるということをお伝えしたいと思います。美術品は人の手から手へと渡っていきますが、私たち人類の宝物であることに変わりはありません。皆でその宝物を分かち合うことができます。皆で素晴らしいと思います。この展覧会はそのまたとない機会となるでしょう。ぜひ、ご堪能ください。(akko)

展覧会 現在進行形

現代美術のハードコアは
じつは世界の宝である展
ーヤゲオ財団コレクションより
9月6日(土)～10月26日(日)

コレクションとは何でしょうか。世の中にはさまざまなコレクターの方がいて、テレビなどでもよく紹介されますが、その、コレクションにかける情熱たるや、もの凄いの

郷土の作家たち

D.D.(ディー・ディー)

今村哲と染谷亜里可からなるアーティストユニット。ともに1961年生まれのふたりはそれぞれ単独のアーティストとして活躍しているが、(今村は1997年、染谷は2003年のポジション展に出品している。)2011年からアーティストユニットD.D.としても活動している。D.D.の名前の由来はもはや定かではないとのことだが、D.D.はこれまで4つの大きなプロジェクトで迷路のような構造を持った体験型のインスタレーションを展開してきた。2011年の《二重に歩くもの》では、迷路のような構造に演劇的な演出も加わり、鑑賞者が作品の中を迷いながら進む一過性の体験そのものが一つのストーリーとなっていく。鑑賞者が作品に関わり、鑑賞者それぞれが主人公となる作品を作り出す装置のようであった。2012年の《半熟卵の構造》は、布で仕切られた空間によって、まるで不思議の国に迷い込んだように作品の中の世界が展開する作品だ。伸縮布によって幾層にも分けられた空間は、人が入ることによって自在に広がる。布の表層だけ見れば単に布で仕切っただけに見えるが、一旦中に入れば、いくつ

もの通路に分かれ、さらには5階建ての階層にもなる。2013年の《2つで3人》では、自在に動く壁によって仕切られた居住空間を制作し、作家を含めた数人が実際に48時間その空間に滞在した。2014年2月から3月にかけて開催された名古屋市美術館の特別展「親子で楽しむアートの世界 遠まわりの旅」展では、体験型のインスタレーション《昼の目 夜の目》の制作を始め展覧会とコラボレーションして話題を呼んだ。D.D.の作品では、それぞれの作品に仕掛けられたストーリーと鑑賞者が作品の中で体験する物語がリンクし、さらに迷路的な構造によって鑑賞者は迷わせられ、出口へ向かおうと焦りながら、まさに不思議の国に迷い込んだアリスのように、D.D.の不思議な世界を体験する。こんな作品は他にはどこにも見たことがない。いったい今後どんな展開になるのか。今後の作品をますます楽しみにしている。(hina)



D.D.《昼の目 夜の目》入り口部分 2014年
写真撮影：怡土鉄夫

どこがおもしろい?!

もう随分前になりますが、2009年の名品コレクション展でホセ・クレメンテ・オロスコの《白い神々》を展示しました。オロスコは、シケイロスやリベラとともに、メキシコ壁画運動の三大巨匠の一人として活躍しました。何やら白っぽい神たちの集団がわいわいと騒んでいるような場面を描いたこの作品は色数も少なく、やや地味な印象がありますが、ちょっと不思議な雰囲気を持っていて、想像力を喚起するようなところがあります。ご覧になった皆様も、いろいろと想像されているようです。くすっと笑えるものから、神についての考察を促されるものまで、皆様の感想をご紹介します。

「おーい、みんな、次の店行くぞ！」
「えー、社長、まだ飲んですか!?って、先輩、飲みすぎて潰れてる場合じゃないっすよー！」
「うるせえ、中島、人間どもの面倒見るのもストレスたまるんだよ。次いくぞ、次！」
「神様の世界も大変だよ」(E. 24歳)

ホセ・クレメンテ・オロスコ《白い神々》は、やせている人が、うんどうをしてもっとやせろぞ!! っておもっているみたいでおかしいな!! まわりのオレンジ色が火みたいで、火にかけているみたいなので、あつそうです!! おどっているのかうんどうしているのかわからないのもうあたまの中がゴチャゴチャ!! もうゆめの中にでてきたら、え!! えええ!! っておもうとおもいます。人の中でゴリラみたいな人とふっきんしているとおもう人がいるんです。ちょーおもしろいなとおもうな!! まあ、ちょっとこわいかなじかな?(チャコワンコ 9歳)

芸術はよくわからん。ただのらくがきか子供の絵の絵でも、美術館にあるのだから、そこがおもしろい。(浦島太郎 29歳)

けんかをして倒れている人がいるのに、助けをしないで見物人がたくさんいる。左の方の人は1人一生懸命その倒れた人を助けようとしているのに、右前の方は「おおごとになって困ったなあ。」と思いながらも助けられないから、わざとその場のふんいきをよくするために和ませているんじゃないかしら? これも社会の縮図みたい!!(くろブルッSKY 34歳)

神って何ですか? 「神々」という私のイメージは、我々しゃばの人間を見守ってくれている存在なのですが、この絵に現れている神々は怖い! そんじょそこらでは天には昇れない! この絵には解説が欲しい。(感性のない堅物人間)



ホセ・クレメンテ・オロスコ《白い神々》1947年頃

こんなにたくさんの人が来るのにトイレがひとつしかないなんて。押すなよ、おれももう限界なんだ。こいつなんてヨコになっちゃったんだよ。(もりまえ 67歳)

硬木に彫られたインカの神々の祭。テキーラに酔いしか、宴たけなわ。音楽が聞こえてきそう。1人、顔に白い色のない男。これは、作者であろうか。見飽きない。見るほどに“うまい画”が浮出て来る。(K.E. 72歳)

残虐な神もいる。人々をくらい、生きる神もいる。神も生きるために必死なのではと思った。神は人が作りだしたモノであって、本当の神という像はないのではと思った。

地下深くでミイラがさわいんでいるようにも見える。(T.T. 12歳)

観戦している熱狂的なファンの人たちに見えます。今、一番良い場面なんだと思います。(もりなが 21歳)

オロスコが活躍した時代、メキシコは革命に揺れていました。壁画家たちは革命を題材に巨大な絵を描きました。そういった壁画家の一人であったオロスコは革命を美化することなく、その真の姿を捉えようとしています。そして、壁画に限らずオロスコの作品の特徴として、現実を美化することなく醜い部分も含めてありのままに描き出している、ということがあります。《白い神々》にもオロスコのそういった部分がよく表れているように思います。白い神々たちは、美しく描かれているというよりは、いろいろな表情を持つ、人間に近い存在のように見えます。そして、集団の中で一人倒れている神のこともとても気になりますね。皆様の感想を拝見していると、オロスコの作品の特色が浮かび上がってくるような気がします。社会の縮図のようなものをこの絵の中に感じ取った方もいれば、神々とは何かという考察をされた方もいらっしゃるかもしれません。人間的でもあり、でもやはり神である白い存在を通じて、地上の世界から天上の世界まで、さまざまなことを想像させる作品なのだと思います。神とは何か。そして人間とは何か。そういった永遠のテーマがこの絵の中に隠されているのではないのでしょうか。(akko)

北脇 昇(きたわき のぼる/1901ー1951)

北脇昇というと、日本の近代美術ファンの皆さん(最近ではめっきり少なくなって寂しい限りですが)には、日本のシュルレアリスム(というよりも超現実主義)絵画の代表作家として知られていることでしょう。この「郷土作家案内」欄に登場することにも違和感があるかもしれませんが。確かに北脇は生涯を京都に暮らして、京都で制作・発表を行なって、人生50年の若さで亡くなったのですから、当然です。

しかし、あまり知られていませんが生まれは名古屋なのです。10歳の頃に京都に移るまで、名古屋で暮らしました。この事実だけでも「郷土作家」の資格は充分なのですが、北脇の場合はもう少し深い名古屋との関係がありました。

1930年、北脇は津田青楓洋画塾に入塾して絵画を学びはじめるのですが、そこには名古屋から来ていた塾生・下郷羊雄(1907～1981)がいました。下郷はこの頃から前衛絵画に関心を抱いていて、ピューリズム(純粋主義)風の抽象絵画を制作しているのですが、何らかの影響を北脇に与えたと思われます。その後、下郷は1932年に帰郷すると自宅アトリエに津田塾名古屋研究所を開設しますが、北脇はその運営・管理を手伝っています。しかし、翌1933年に津田青楓がプロレタリア文化運動への協力により検挙・拘束され、日本画転向を宣言して、津田塾が閉鎖されると、二人はそ

イベントレビュー

緊急特別講演会：
中西夏之、ハイレッド・センターを語る！
(2013年12月14日 講堂)

「ハイレッド・センター：『直接行動』の軌跡」展を開催するにあたって、企画担当の学芸員としての唯一、最大の願望が、HRCの「センター」すなわち「要」であった中西夏之さんにHRCについて語ってもらうことでした。

本展の構想は、今から18年前の1995年に遡ります。あの阪神大震災が起こった4日後に開幕(そして、あの地下鉄サリン事件が起こった13日後に閉幕)するという激動のなかで開催した「赤瀬川原平の冒険:脳内リゾート開発大作戦」展の準備過程において、赤瀬川さんからHRCの頃のような出来事や交友関係などについて、問わず語りに聞いた言葉のなかにあります。曖昧な記憶ですので、あまり正確ではないかもしれませんが、「HRCのイベントは、高松、中西、和泉、そして僕だけでなく、刀根や風倉なんかも含めて、みんなで相談しながら決めたんだけど、やっぱり中心になったのは中西なんだよ。三人のなかでは、一番年上で兄貴分だったし、山手線とか、帝国ホテルとか、銀座の並木通りとか、ともかく場所を決めるときに、すごくて確なんだ」というのです。『東京ミキサー計画』や『いまやアクション

イベントガイド

■マインドフルネス！
高橋コレクション展 決定版2014
日本屈指の現代美術コレクターにして精神科医である高橋龍太郎氏の2000点にも及ぶコレクションの中から草間彌生、村上隆、奈良美智など現代の日本を代表する作家からフレッシュな若手の作家まで厳選した作品を紹介します。
会期：4月12日(出)～6月8日(日)
料金：一般1,000円・高大生700円・小中生無料
【オープニング記念トーク】
日時：4月12日(出)午後2時～
内容：高橋龍太郎氏と出品作家によるトーク
■挑戦する日本画：1950～70年代の画家たち
敗戦後の厳しい現実のなかで巻き起こった「日本画滅亡論」を超えて、新しい日本画の創造に静かに熱く挑戦した画家たちの1950年代から1970年代の「現代の日本画」の代表作を集成する展覧会。日展、院展をはじめ、戦後に誕生した革新的なグループ「創造美術」、前衛的なグループ「パンリアル」、そして「これが日本画だ！」展に参加した画家まで、約40作家の作品約70点を紹介します。

れぞれ独自の道を進みながら、次第にシュルレアリスム絵画へと接近していきます。

北脇は1935年には京都で新日本洋画協会を結成して、下郷は1936年に新造型美術協会に参加します。1937年には山中散生・瀧口修造の企画による「海外超現実主義作品展」が全国(東京、京都、大阪、名古屋、金沢)で巡回開催されて、戦時下の厳しい状況のなかで、日本のシュルレアリスム運動は全盛期を迎え、1940年に美術文化協会が結成されました。

北脇は結成会員として参加し、下郷はこの頃前衛写真に専念していたために不参加でしたが、下郷に師事していた若い画家たち(岡田徹、吉川三伸など)が参加しました。

このように北脇は、下郷羊雄とシュルレアリスム運動によって、名古屋と結ばれていたのです。(sy)



北脇昇《春に合掌す》1942年

あるのみ!」など、これまでHRCは「レッド」こと赤瀬川さんによって語られてきました。その練達の筆致によるHRCの「直接行動」は、半世紀も前の出来事とは思えないような斬新さを感じさせるものです。記録写真とともに、「何が行なわれたのか」ということが、生き生きと鮮明に語られていました。

しかし、「センター」の視点から顧みられるHRCはどのようなものであったのか、いつかHRC展を開催するときには、中西さんに語ってもらいたいと、このとき思ったのです。

特別講演会の会場は満席でした。HRC世代から20代の若者まで、皆さん瞳を輝かせて、中西さんを迎えました。今春に体調を崩されたこともあって、展覧会の開幕直前まで日程が決まらなかったのですが、当日は元気な姿で登壇されました。開口一番、「ダンスには、ソロ、デュエット、トリオ、クワルテットなどがあって…」という中西さんらしい予想を遥かに超える言葉からはじまって、独特の感覚に支えられた語彙と論理によって「集団における行動」といったことが語られ、司会者の不手際もあって、なかなかHRCの核心に近づくことなく旋回を繰り返しながら、ようやく最後にHRCの「センター」である自己の存在が、文字通り「中」と言えば、必ず「上」「下」あるいは「前」「後」があるように、「ハイ」と「レッド」とともにあったことをあらためて確認する言葉で締めくくられました。渋谷での巡回展において、中西さんが何を語るのか、今から楽しみです。(sy)

会期：7月5日(出)～8月24日(日)

■常設展

○名品コレクション展 I (前期)

名古屋市美術館のコレクションから厳選した作品を紹介します。

会期：4月12日(出)～6月8日(日)

エコール・ド・パリ：パリの女性たち

メキシコ・ルネサンス：労働(者)

現代の美術：1950年代～60年代の美術

郷土の美術：“牧歌的”風景

ー春から初夏にかけて

■コレクション解析学

※2F講堂・無料・先着180名

○第1回

日時：5月18日(日)午後2時～

演題：「私はいったい何者なのか？」

講師：深谷克典(名古屋市美術館副館長)

作品：藤田嗣治《自画像》1929年

○第2回

日時：7月27日(日)午後2時～

演題：「『男と女』は何を語っているのか。」

講師：山田諭(名古屋市美術館学芸係長)

作品：中村正義《男女》1963年

休館日は月曜(祝休日の場合は翌平日)、4月1日(火)～11日(金)、6月10日(火)～7月4日(金)です。詳しくは[HP](http://www.art-museum.city.nagoya.jp)http://www.art-museum.city.nagoya.jpをご覧ください。(MI)

展評

2013年12月7日(土)～23日(月・祝)
L Gallery

“Re reincarnation” 河村るみ展

河村るみは1980年愛知の生まれ。名古屋芸術大学を卒業、愛知県立芸術大学大学院を修了し、今も愛知に在住しています。2012年からは長者町(名古屋市中区)でAMR (Art Media Room)という共同アトリエを2人の作家と持ち、一角に展示スペースを設けて他の作家にも発表の場を提供するなどの活動をあわせて行っています。

河村は絵画科の出身ですが、パフォーマンスやパフォーマンスを映像にした作品で評価を高めてきました。ワークショップや参加型の作品でも美術館などの公的な場所での発表が近年つづき、記憶に新しいところでは「あいちトリエンナーレ2013」のキッズトリエンナーレに選出されています。

今回の個展は、映像作品は1つ。残りは平

展評

2013年12月16日(月)～2014年1月25日(出)
中京大学アートギャラリー C・スクエア

ラスト・シーン

20年にわたり様々な企画展を開催してきたC・スクエアが、残念ながら今年の3月で活動を終了することになりました。その公式企画展の最後を飾ったのが、第116回企画「ラスト・シーン」です。

「ラスト・シーン」は3人展で、まず鴻池朋子さんの作品群から始まりました。宇宙と体内、地表と地中、少女性と野性といった対極的な要素が表裏一体のように同居する鴻池的世界観は、例えば今回のメインとなったジオラマ作品《博物館の惑星》でも存分に発揮されていました。鴻池さんは現在、秋田・森吉山を登ったところにある登山者用避難小屋の作品化を進めており、これから描かれる予定の壁画の構想スケッチが数点展示されていました。極端に言えば人が生死の境に近づくような場所で、作家は何を見せようとしているのか、今後の展開に期待を抱かせるものがありました。

60年代初頭から8mmによる映像制作を手掛けてきたかわなかのぶひろさんは、自身の経歴が辿れる4つのプログラム(計7作品)を週替りで上映されました。私が拝見したのは、作家が名古屋のカメラ店で入手した数十年前のブルーフィルムを編集・加工した《名古屋で出会った8ミリフィルムの話》でした。素材にも編集の手法にもノスタルジックなものを強く感じ、「8mmフィルムの回る音はセ

BOOK

『ヘンな日本美術史』

山口晃著、祥伝社、2012年

昨年、第12回小林秀雄賞を受賞した話題作です。「ヘンな」という枕言葉は、著者によれば、西洋や中国から見るとちょっと変わった描き方をする日本美術、という意味と、自分の気になる絵を時代順に並べただけの風変わった日本美術の歴史、という二つの意味が込められているそうです。いずれにしても専門の研究者ではない一介の画家が書いたものですから、という著者の謙虚な姿勢が題名に表れているわけですが、読み進めると謙虚だけではない自信が至る所に垣間見えてきます。ありきたりの日本美術史ではない、今まで誰も試みたことのない切り口の作家論や作品論がこの本の中にはあふれています。基本的な事実関係はしっかりと押さえながら、いたずらに過去の研究の主張に振り回されることなく、画家としての自分の経験と視点を十二分に生かした新鮮な解釈が、平易な言葉で綴られます。

たとえば冒頭で取り上げられる《鳥獣戯画》。あまりに上手すぎて実は以前はあまり好きな作品ではなかった、といきなり肩すか



会場風景 (中央《open the window 1996-2013》と右下《hole 1998-2013》)

面か平面を利用した立体作品で、これまでパフォーマンス系の作品をいくつか見てきた評者には新鮮な印象がありました。私とは何かという問いのもとに河村は制作をつづけているように評者は感じていますが、「自分をつくることと、自分を消すことは同じ」という気づきのもとに制作された作品は、過去に描いた絵画作品を切り抜き重ねて奥行きを覗かせる《hole》はもとより、《open the window》などの他の作品にも行為の痕跡や



畠山直哉《高田町長砂 2013/6/16》

クシーだ」という、かわなかさんならではの言葉が印象に残りました。

最後に、畠山直哉さんが故郷・陸前高田を撮影した写真。これらを名古屋で目にする機会が与えられたというだけでも、この企画展が開催された意義があると感じます。出品されたのは《陸前高田2012-2013》と題された14点で、震災1年後から最近までの陸前高田の様子を見ることができます。多くの場面が高台から(あるいは引きで)撮影されており、再興・整地が進む一角と津波の爪痕とが共存しているのが印象的でした。瓦礫は回収され(所々に集積場が見える)、凄惨な状況はだいぶ解消されたようですが、かつて町があった場所は膨大な空地となってひらけ、言いようのない空虚感が襲ってきます。空地でグラウンドゴルフを楽しむ高齢者の様子や、おそらくプレハブで営業している表具店の「ふすま」と書かれたのぼりなど、非現実的な景色の中で日常が過ぎている事実を目にして、安堵と寂しさが入り混じった複雑な感情を覚えました。(nori)

しと思わせながら、実物を初めて見たときの墨の美しさを詳細に語り、さらに経験を積むことによって、これ見よがしと当初感じられた技術の冴えを、次第に楽しめるようになったことが素直に述べられます。この《鳥獣戯画》だけでなく、この本で取り上げられる全ての作品について言えることですが、著者が実物を見た時の印象が実に率直に語られるのが、この本の大きな魅力です。頭でこね上げた作家や作品論ではなく、著者の体を通しての滋味あふれる言葉がそこにはあり、それが日本美術の魅力を生き生きと私たちに伝えてくれます。それだけではありません。「不遇のうちに亡くなる天才神話」という近代の芸術物語を批判し、「絵から経済を遠ざけるのは近代の錯覚」と一喝。一方で「美術」という明治に発明された言葉で、雪舟や北斎を語ることの不毛を嘆くなど、現在の視点を過去に当てはめて作品を評価することの危うさが繰り返し語られます。他にも、大画面作品を描くには腕力が必要といった、いかにも画家ならではの視点による技法分析など、読みどころ満載の一冊です。選考委員の一人、橋本治氏は、こんな賞を画家に与えると、今後の画家としての仕事に差し支えるのではないかと、冗談交じりの賛辞を送っていましたが、冗談抜きでしばらく執筆活動に専念してみても、と言いたくなるほど次作が待ち遠しい充実した内容です。(F)

行為に伴う時間の堆積が見て取れました。平面作品にも積層するものへ志向が感じられて、複数の映像を重ねるパフォーマンス系の作品と共通する発想と感覚を認めました。

映像作品の《lesson 1 2 3 4》は、「立つ」「座る」「横になる」「いなくなる」という4つの状況からなり、それぞれ15分ずつ計1時間の単位をなすものが、はじまりの行為を1つず

展評

2014年1月11日(土)～3月23日(日)
愛知県陶磁美術館

開館35周年記念 企画展

北欧のやきもの：1950's-1970's

数年前、陶芸家ルーシー・リーの展覧会が国内を巡回し、これまでの陶磁器のイメージを払拭する色味と古代文明や日本の民藝を思わせる意匠の融合による独特のスタイルで話題となりました。これを機に西洋近現代陶磁史に関心を持った方も多いことでしょう。今回紹介する展覧会はデンマーク、スウェーデン、ノルウェー、フィンランド4国における陶磁史のうち1950年代から70年代の約20年間に焦点を当てたものです。

展示は、4カ国それぞれにおける製陶の特徴や代表作家の活動を追いながら作品を紹介する第1章から第4章までと、戦後日本における北欧デザインおよび工芸の影響にふれる第5章「日本-北欧とのかかわりから」で構成されています。北欧における中国陶磁の研究は19世紀後半から20世紀初頭にかけて盛んになり、古窯址踏査などの学術研究のほか実物資料の収集も熱心に行われ、技術的にも造形的にも深く理解されるに至ったようです。戦後は日本、北欧それぞれの研究者やデザイナー、民藝の関係者が互いの土地を訪ね、視察や実習を通して交流を図ったことが豊富な

CULTURE, MOVIE, DRAMA&MUSIC

バリアがなくなると、生きることが楽しくなる！

『バリバラ』

NHK Eテレ 毎週金曜 午後9:00～9:30
(再放送：毎週水曜 午前0:25～0:55)

『バリバラ』は、障害者情報バラエティー番組。『きらっといきる』から番組改編されて、2012年4月から放送されています。「バリバラ」は「バリアフリーバラエティー」の略。番組ホームページによると、「No Limits (限界無し)」をモットーに、日常生活のあらゆる事柄について障害者が本当に必要とする情報を楽しく届けてくれる番組です。「バリアがなくなると、生きることが楽しくなる！」もですが、「本音をとことんぶつけあい、一緒に笑って、一緒に考えて、本気でバリアフリーな社会を目指します!!」とホームページにあります。

私は障害のある方に美術館をもっと利用していただく取り組みに関わってきたこともあり、この時間帯の番組を折々視聴してきましたが、『バリバラ』には「障害者関係の番組もここまできたか」と思いました。NHKでは全般的に親しみやすい番組作りが行われるようになっていますが、それだけでなく、障害を持つ人自身やまわりの人々の意識が変わってきていることを感じます。

障害のある人と接しているといろいろな疑問が浮かんできます。直接聞いて確かめることができることやときもあれば、そうでない

つずらしながら4つ重ねられています。死を意識しているというこの作品は、生まれ亡くなる人のありようをなぞらえ、画廊の私的空間においてはじめて成り立つ性格を持っています。無駄なく切り詰められた表現は、おそらくある期間作家のなかで育まれてきたものであろうと感じました。(み。)

写真資料をまじえて紹介されており、工芸とデザインの境界や産業と芸術の共存などにも目を向けさせる内容でした。

日常的に接する食器、花瓶から現代的なオブジェ作品に至るまでバラエティに富む出品群の中、日本・東洋の美術工芸史を学んだ私としては中国の金から明の時代にかけて作られた鈞窯からの影響を受けたとおぼしき藍釉系の色合いの器、日本の民藝との影響関係を感じさせる造形が予想以上に目受けられたことは懐かしくも新鮮な驚きでした。曜変天目へのオマージュとも取れる碗もありましたが、器の形状、釉薬の色やかけ方、装飾の施し方など決して単純な写しではありません。良いものは良いと優れたものを進んで受け入れ咀嚼し、独自の発想に基づいて創り上げた北欧の人々の柔軟な思考に、国を超えた温故知新を感じました。(3)



トイニ・ムオナ《色釉斑文碗》1950-60年代

ことやときもあり、そんなときは推測が頭を駆け巡ります。『バリバラ』は、私のこういう疑問にもいくつか答を示してくれましたが、分からないというバリアがなくなると気持ち分かります。そう思うと、「バリアがなくなると、生きることが楽しくなる!」のは、障害者だけのことではないと感じます。『ためしてガッテン』のように、『バリバラ』のようなバリアフリーバラエティー番組が総合テレビのゴールデンタイムで放送されるようになって欲しいと思います。それが普通なら、日本は豊かさを増したと言えるのではないのでしょうか。

同じEテレの『ハートネットTV』(毎週月曜～木曜 午後8:00～)もおすすです。番組のオープニング映像をTOCHKAが担当しています。2012年度の「Our Voices」は、Chim↑Pomのエリイが進行役をつとめていました。福祉の主題が美術の主題として取り上げられることも多くなっています。美術を楽しむためにも参考になります。(み。)

NO IMAGE

【編集後記】

夏号で酷暑を話題にするのは恒例となりつつありますが、今年は立春後に訪れた二度の記録的な大雪と寒さ、そして冬季オリンピックによって皆さんの記憶に強く残る冬になったのではないのでしょうか。かくいう自分も雪による交通機関の混乱を心配して予定していた遠出を取りやめたり、寒さ対策に耳あてを衝動買いしたり、深夜の競技をついリアルタイムで視聴したりと少なからず振り回され、天候と時差だけは意のままにならないと再認識しました。そんな間にも白川公園の木々は枝の先を赤く染めて、芽吹きを今か今かと待っています。この号がお手元に届く頃には暖かな日差しと新緑が溢れていることでしょう…浮かれていると消費税が8%に上がることをうっかり見過ごしてしまいそうです。禍福はあざなえる縄の如し、何もかも望みどおりとは行きませんが毎日ささやかな楽しみや喜びを見つけて過ごしたいと思う日々です。あー花粉症つらい。(3)

アートペーパー第95号 発行日：2014年4月1日

発行 名古屋市美術館

【芸術と科学の杜・白川公園内】

http://www.art-museum.city.nagoya.jp/

〒460-0008

名古屋市中区栄二丁目17番25号

地下鉄《伏見駅・大須観音駅・矢場町駅》下車

Tel.052-212-0001 Fax.052-212-0005

休館日：毎週月曜(祝日の場合は直後の平日)

開館時間：午前9時30分～午後5時

祝日を除く金曜日は午後8時まで

※入場は開館の30分前まで

Nagoya City Art Museum